

機関番号：34504
 研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2007～2010
 課題番号：19320137
 研究課題名（和文） 地方をフィールドとした朝鮮半島系住民のネットワークと生活世界の多声性に関する研究
 研究課題名（英文） A study on the Network of Korean People Living in the Province and Variety of Voices of their World.
 研究代表者
 島村 恭則（SHIMAMURA TAKANORI）
 関西学院大学・社会学部・教授
 研究者番号：10311135

研究成果の概要（和文）：

本研究は、地方地域社会をフィールドに、朝鮮半島系住民が切り結ぶ地域的ネットワークと、彼らの生活世界の多様な実態について明らかにした。具体的には、北海道、日本海沿岸、中・四国、九州の各地方都市、および東京都、横浜市、大阪市での共同、個別調査を実施し、その成果の相互比較にもとづいて、ネットワークと生活世界の多声性について解明した。これにより、大都市中心に行なわれてきた既存の朝鮮半島系住民研究の成果の相対化が可能となった。

研究成果の概要（英文）：

With this study we clarified the regional networks the inhabitants of Korean living in Japan started and their various actual ways in their life-style in their local community.

Specifically, we carried out separate and joint investigations in local cities such as Hokkaido, the Japan sea coast, Chugoku, Shikoku and Kyushu, as well as Tokyo, Yokohama, Osaka. Based on the intercomparison of the results, we elucidated about the various characteristics of the networks and the life-styles. From these results, comparison with the existing study of the Korean inhabitants living in Japan conducted in large cities became possible.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	4,400,000	1,320,000	5,720,000
2008年度	3,700,000	1,110,000	4,810,000
2009年度	3,200,000	960,000	4,160,000
2010年度	3,100,000	930,000	4,030,000
年度			
総計	14,400,000	4,320,000	18,720,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・文化人類学・民俗学

キーワード：少数者研究、在日朝鮮半島系住民、地方地域社会、生活世界の多声性、ネットワーク、日常的実践、引揚者、民俗

1. 研究開始当初の背景

これまで、フィールドでの実態調査にもとづく朝鮮半島系住民の研究は、原尻英樹『在日朝鮮人の生活世界』（弘文堂、1989年）、谷富夫『民族関係における結合と分離』（ミネルヴァ書房、2002年）、飯田剛史『在日コ

リアンの宗教と祭り』（世界思想社、2002年）をはじめ、社会学や文化人類学などで多くの蓄積がある。だが、それらの既存の研究は、唯一例外的に筑豊の一集住集落を扱った初期の原尻英樹の業績を除けば、すべて大阪、東京、川崎といった大都市の朝鮮半島系住民

集住地を調査対象としており、地方の地域社会をフィールドとした集約的調査はまったくなされてこなかった。こうした調査対象地の偏向から、地方と大都市、あるいは地方間に結ばれている朝鮮半島系住民同士のネットワークについてはその実態がまったく把握されずにきたのである。地方をフィールドとした朝鮮半島系住民のネットワークと生活世界の多声性についての実証的研究が朝鮮半島系住民研究における重要な課題として残されていたというのが本研究開始当初の背景的状况であった。

2. 研究の目的

上記の背景をふまえ、本研究は、地方の地域社会を主たるフィールドに、朝鮮半島系住民（植民地時代に日本に移住した朝鮮半島出身者とその子孫、および戦後に渡日したニューカマー韓国人、中国朝鮮族等。韓国・朝鮮籍者に加え日本国籍取得者や中国籍者も含む）が切り結ぶさまざまな社会的ネットワークと、かれらの生活世界の多様な実態について明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

日本国内の地方都市をフィールドに共同、個別調査を実施した。そしてその成果の相互比較にもとづいて、日本列島上の各地方を結ぶ朝鮮半島系住民のネットワークと各地方地域社会における朝鮮半島系住民の生活世界の実態について、その特徴を抽出した。その上でこの成果をもとに、これまで大都市中心に行なわれてきた既存の朝鮮半島系住民研究の成果の相対化をめざした。

共同、個別調査の調査・分析指標は、以下のものを設定した。

(1) 朝鮮半島系住民の流入、居住、転出の実態。集住地の形成／非形成過程。

(2) 親族ネットワーク、就労ネットワーク、教育ネットワーク、信仰ネットワーク、婚姻仲介ネットワーク、民族団体ネットワーク等、各種社会的ネットワークの形成・変容過程とネットワーク上の移動実態。

(3) 地域社会との相互関係（商工業、地域祭礼への参加、居住地の占有、行政との交渉、他のマイノリティグループとの関係など）。

(4) 生業、衣・食・住、儀礼・信仰等における生活実践の具体相。

なお、いずれの項目についても、階層、ジェンダー、国籍、前住地、民族団体への関与、職業、日本人との付き合い方等に関わる多声性（生活世界の多声性）に十分配慮した記述・分析を行なった。

4. 研究成果

国内の地方地域社会をフィールドに、共同調査（北海道、青森、宮城、広島、兵庫、大

分）、個別分担調査（岩手、宮城、東京、神奈川、静岡、京都、大阪、香川、愛媛、鳥取、広島、山口、福岡、宮崎、鹿児島、沖縄）を着実に実施するとともに、共同調査に併設して共同研究会を開催してきた。これらの調査・研究会活動により以下の知見を獲得することができた。

(1) 在日朝鮮半島系住民の広域ネットワーク。

本研究における現地調査の結果、神戸、大阪、東京などの集住地をコアセンターとしつつ、九州、瀬戸内から北陸、東北、北海道に広がる在日朝鮮半島系住民の移動と、それを可能にしたネットワークの存在、あるいはこのネットワークを基盤に現在の移動や生活世界の広がりがあることが確認できた。また、地方都市においては、各民族団体の支部に加え、戦後に形成された闇市起源の商業地域（多文化状況を反映して「国際市場」などと命名されている場合が少なくない）がネットワークの結節点となってきたことも明らかになった。

(2) 広域ネットワークを可能にした歴史的過程および社会的背景。

在日朝鮮半島系住民の広域移動、広域ネットワーク形成の背景には、日本の近代化の過程における都市労働者層の形成と移動、生活世界が基盤にあり、また日本国内の労働移動に大きな役割を果たした航路（とりわけ九州－瀬戸内航路）、鉄道の存在があった。航路あるいは鉄道に沿って各地に在日朝鮮半島系住民の居留地が形成され、それはその後の移動に大きな影響を与えたことが明らかになった。これまでの研究では、朝鮮半島系住民の問題はそれ自体が単独で扱われることが多く、日本の都市社会の歴史的形成過程、地方－都市の間の労働移動などは重視されてこなかったが、今回の調査により、そのような各地域社会の脈絡を踏まえることの重要性が明らかになった。

(3) 在日朝鮮半島系住民と他のエスニックグループとの相互関係。

従来の研究では在日朝鮮半島系住民と日本人を対置させ、日本人住民を一つのカテゴリとして取り扱ってきた。いわゆる民族間関係もそのような単純モデルで検討されてきた傾向があった。しかし、本研究における調査からは、日本人住民における多様性、多層性（引揚者、被差別部落住民、奄美・沖縄系住民）や都市の階層性の中で、多くの接触領域があり、相互関係が取り結ばれたり、あるいは棲み分けが行なわれたりするなどよりダイナミックな状況が見出された。

(4) 進駐軍との相互関係。

千歳市(千歳基地)、三沢市(三沢基地)、別府市(基地チッカマウガ)での調査により、戦後混乱・復興期において、進駐軍基地の設置が朝鮮半島系住民の居住地移動、集住を大きく規定していたこと(逆に言うと、別府のように基地が消滅した場合には朝鮮半島系住民の集住も消滅する)を明確にすることができた。また、ここでの知見をもとに、従来の在日朝鮮半島系住民史では、「在日朝鮮半島系住民」vs.「日本人」という二元対立が歴史記述の基調となっていたが、1945年以降、1950年代においては、「在日朝鮮半島系住民」「進駐軍」「日本系住民」の3者関係で実態を把握することが実情に即したものであるとの理解に至った。これは、たとえば、「ホルモン料理は日本人が捨てた内臓を在日が利用したことによる起源がある」という言説が、「進駐軍基地での肉の需要からは除外されていたホルモンが在日社会に流れてホルモン料理となり、それを日本人労働者層も享受した」(三沢市等)という事実によって相対化されるということの意味するものである。

(5) 朝鮮半島系住民が生み出した地域文化。

朝鮮半島系住民の移動・居住先においては、当該地域社会の社会史的背景と密接な関係を持ちながら、朝鮮半島系住民によって地域色の濃い地域文化(とりわけ食文化)が生成していることが明らかになった。具体的には、三沢市・十和田市のバラ焼き、東松山市の豚ホルモンのやきとり、盛岡市の盛岡冷麺、別府市の別府冷麺である。本研究では、これらのすべてについてその発生、展開のプロセスを詳細に把握している。

(6) 「知られざる集住地域」の発見。

本研究遂行の過程で、日本列島各地に存在しながら、これまで当事者以外には知られていなかった集住地区の存在を把握することができた。具体的には、北海道千歳市、青森県三沢市・十和田市、秋田県秋田市、宮城県仙台市、静岡県静岡市、福岡県福岡市、大分県別府市・大分市、熊本県熊本市における集住地区である。これらについては、詳細な民族誌的調査を実施しており、今後、本研究の全体的な成果の公刊と並行してそれらの地域の個別民族誌を順次公表することになっている。

(7) 「生きられた在日朝鮮半島系住民史」と「公的歴史表象としての在日朝鮮人史」。

従来の「在日朝鮮人史」では、同一地域内の朝鮮半島系住民史が語られる場合に、戦前の生活史と戦後の生活史が連続するものとして表象されることが少なくなかったが、両

者の間には断絶も存在することが本研究において明確になった。とりわけ、北海道の朝鮮半島系住民史においては、戦前に徴用等で渡道した人々の戦後残留も見られるものの、一方で、戦後に本州から渡道した人々も少なくなく、戦前と戦後とで、朝鮮半島系住民史の当事者の間に断絶がある場合もあること、しかしながら、民族団体等による公的歴史表象においては戦後の在日史が戦前からの連続性で語られる場合があること、すなわち、「生きられた在日朝鮮半島系住民史」と「公的歴史表象としての在日朝鮮人史」のふたつの「歴史」が存在していること、が明らかになった。

(8) 「民族文化」「民族的アイデンティティ」をめぐる多声性。

本研究の一連の調査を通して、在日朝鮮半島系住民の中には、朝鮮系事象を多用し、場合によってはそこに「民族的アイデンティティ」の象徴としての意味を付与しようとする人びととともに、「民族」を至上の命題とはせず、生活上の必要に応じて、朝鮮系事象か日本系事象かの別に関わらず、さまざまな事象を柔軟に選択、運用する人びともまた少なからず存在することが明確になった。また、「民族的アイデンティティ」が強く自覚される「アイデンティティ」状況とともに、「アイデンティティ」が意識されないことも含めて、個々人の〈生きる方法〉に根ざした多様で柔軟な「アイデンティティ」状況の展開をそこに見出すこともできた。これは、従来の在日朝鮮半島系住民研究の成果を大きく相対化する知見である。すなわち、これまでの在日朝鮮半島系住民研究では、在日朝鮮系住民における「民族文化」や「民族的アイデンティティ」のあり方が最優先の研究課題とされてきたが、本研究での知見を踏まえると、既存の研究では、「民族文化」「民族的アイデンティティ」の枠組みに収まらない現象は、意識的、もしくは無意識的に調査・記述の対象から排除されてきたのではないかということに思い至る。本研究は、「民族文化」「民族的アイデンティティ」に特化した在日朝鮮半島系住民研究のパラダイムを乗り越える成果を生み出しえたと考える。

以上が本研究で得られた主要な知見の概要であるが、これらの知見からなる本研究の成果は、全体として、大都市中心かつ「民族文化」「民族的アイデンティティ」特化型の既存の研究では明らかにしえなかった在日朝鮮半島系住民の姿を浮かび上がらせることができたといえる。このことから、本研究の当初の目的は十分に達成できたと自己評価するものである。

なお、ここに記載した知見と関わって、本

研究では多くの個別民族誌的データを蓄積しているが、それらについては、今後刊行予定の学術論文の中で公にしていくことになっている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計20件)

- ① 島村恭則「別府と伊東—アジュールとしての温泉都市—」『関西学院大学先端社会研究所紀要』第5号、31—36頁、2011年、査読無。
- ② 宮下良子「龍王宮の空間が語るもの」『コリアンコミュニティ研究』第1号、1—6頁、2010年、査読無。
- ③ 高 正子「大阪済州人の祈り—ある済州島出身女性の事例から—」『コリアンコミュニティ研究』第1号、15—20頁、2010年、査読無。
- ④ 高 正子「〈民俗〉の発見から「伝統文化」の誕生へ」『現代韓国朝鮮研究』第10号、89—99頁、2010年、査読有。
- ⑤ 宮下良子「済州スニム(僧侶)のトランスナショナルリティー—大阪市生野区の事例を中心に—」『白山人類学』第12号、35—51頁、2009年、査読有。
- ⑥ 政岡伸洋「差別と人権の民俗学」『日本民俗学』第252号、5—34頁、2007年、査読有。

[学会発表] (計22件)

- ① 島村恭則『「エスニック・グループとしての衆・党・部」日本海総合研究プロジェクト国際シンポジウム「多言語化する地方」』、富山大学、2011年1月8日。
- ② 島村恭則「在日コリアン研究の動向と課題」東アジアのコリアン・ネットワーク—その動向と実践(国際シンポジウム)、国立民族学博物館、2010年12月26日。
- ③ 岡田浩樹『「混線」する文化の民族誌—『多文化共生』以前の神戸・長田』日本文化人類学会第44回研究大会、立教大学、2010年6月13日。
- ④ 鈴木文子「地域誌のなかの帝国日本と植民地—鳥取県旧S町周辺地域の移住者たち—」日本文化人類学会第44回研究大会、立教大学、2010年6月13日。
- ⑤ 高 正子「在日コリアンの民俗芸能の継承」日本文化人類学会第44回研究大会、立教大学、2010年6月13日。
- ⑥ 岡田浩樹「混線する民族の境界線—『多文化共生』以前の神戸・長田—」日本民俗学会第61回年会、國學院大学、2009年10月4日。

- ⑦ 宮下良子「周縁の民俗誌—大阪府堺市の在日コリアン・コミュニティの事例から—」日本民俗学会第61回年会、國學院大学、2009年10月4日。

[図書] (計8件)

- ① 島村恭則『〈生きる方法〉の民俗誌—朝鮮系住民集住地域の民俗学的研究—』関西学院大学出版会、2010年、321頁。
- ② 島村恭則『在日コリアン事典』明石書店、2010年、815—816頁。
- ③ 高正子『在日コリアン事典』明石書店、2010年、791—792頁。

[その他] (1件)

島村恭則 公開講演「戦後を生き抜いたコリアンたち—福岡市での集住と暮らし—」在日韓人歴史資料館開設5周年記念福岡特別展「在日100年の歴史を後世へ」記念セミナー、2010年12月4日、福岡市博物館。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

島村 恭則 (SHIMAMURA TAKANORI)
関西学院大学・社会学部・教授
研究者番号：10311135

(2) 研究分担者

岡田 浩樹 (OKADA HIROKI)
神戸大学・国際文化学研究科・教授
研究者番号：90299058
鈴木 文子 (SUZUKI FUMIKO)
佛光大学・歴史学部・教授
研究者番号：40252887
政岡 伸洋 (MASAOKA NOBUHIRO)
東北学院大学・文学部・教授
研究者番号：60352085

(3) 連携研究者

宮下 良子 (MIYASHITA RYOKO)
大阪市立大学・都市研究プラザ・G-COE 特別研究員
研究者番号：00449977
高 正子 (KO GEONGJA)
天理大学・国際文化学部・非常勤講師
研究者番号：80441418

(4) 研究協力者

羅 基台 (LA KIDAE)
在日韓人歴史資料館・事務次長・研究員